



Title	<書評>白波瀬達也著『貧困と地域—あいりん地区から見る高齢化と孤立死』
Author(s)	安藤, 徳明
Citation	宗教と社会貢献. 2017, 7(2), p. 39-43
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/65070">https://doi.org/10.18910/65070</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 書評

白波瀬達也著

『貧困と地域—あいらん地区から見る高齢化と孤立死』  
中央公論新社、2017年2月、新書判、222頁、800円（税別）

安藤徳明\*

## 1. はじめに

本書は、貧困の地域集中とその影響について論ずるところを主題としており、あいらん地区を一つの事例として、他の地域社会に対する示唆を得ることを目的とした気鋭の一冊である。

社会や文化という複雑な現象の解明には、「これが絶対で最善だ」と言えるような理論も手法もない。社会や文化を的確に理解していくためには、理論、手法、対象など様々な点で、できるだけ多様な角度から検討していかなければならない [佐藤 2006: 20]。本書は、あいらん地区という複雑な事情を抱える地域社会に対し、幅広く先行研究を渉猟し、著者の長年にわたるフィールドワークの経験を基に執筆されている。あいらん地区というフィールドを、「多様な角度から検討した」フィールドワークの良書という一面が、本書の類書と一線を画する大きな特徴の一つである。

## 2. 本書の構成と内容

序章 暴動までの歴史的背景

第1章 日雇労働者の町として

第2章 ホームレス問題とセーフティネット

第3章 生活困窮者の住まいと支援のあり方

第4章 社会的孤立と死をめぐって

第5章 再開発と向き合うあいらん地区

終章 地域の経験を活かすために

本書の目次構成が示す通り、まずは、貧困がいかんにして生み出されたか

---

\* 淑徳大学アジア国際社会福祉研究所 リサーチ・フェロー  
pretty penny@hotmail.co.jp

を中心にあいりん地区の歴史を辿っていく。そして、「住まいの貧困」「社会的孤立・孤立死」「再開発」という、あいりん地区に様々な形で現れる貧困の現象について議論する。最後に総括がなされ、あいりん地区での経験を他の地域へ向けていくことの重要性が説かれる。

これより以下に、各章の概要を示す。

序章では、もともと釜ヶ崎と呼ばれていた地域が、行政によって「あいりん地区」として指定されるまでの歴史的過程を辿る。当時の釜ヶ崎は、意外にも住民の構成比は女性の方が高く、単身男性が中心の町という現在のイメージとは異なる部分を持つ。著者は、1959年度に実施された「西成区釜ヶ崎実態調査」の成果となる論文を引き、釜ヶ崎の地域特性を概観しつつも、釜ヶ崎を社会病理の集積地とみなし、貧困の原因を個々人の性格や行動に規定するスタンスには疑問を呈する (p.14)。あいりん地区への指定は、繰り返される暴動を契機とするが、その火種は、当時より社会から厳しい目を向けられてきた釜ヶ崎に確かに存在するのである。

第1章では、高度経済成長期からバブル経済崩壊にかけてのあいりん地区の町の変化に対する通時的な解釈が示される。1970年の大阪万博に向けた労働力需要の高まりにより、あいりん地区は日雇労働力の集積地として単身男性が集住するコミュニティとなった。これには、行政による住宅政策を要因とする見方が一般的であるが、著者はそれに加えて、度重なる暴動や過激な社会運動への不安により親族世帯が流出したことにその要因を見る (p.35)。バブル経済崩壊後、雇用の構造的な脆弱性を持つあいりん地区は深刻な失業問題に見舞われる。その結果、あいりん地区では野宿者が激増し、多層的なセーフティネットが築かれていくこととなる。

第2章では、あいりん地区におけるホームレス問題とその対策の結果について論が展開される。社会福祉制度の機能不全を背景として、ホームレス問題は全国的な広がりを見せるが、特に顕著に現れたのがあいりん地区であった。その後の生活保護制度の適用により野宿者の数は減少し、あいりん地区における定住性は高まることとなったが、著者は「複合的不利」を抱える人々への支援には、物質的資源の提供に加え、社会関係の不足を補う取り組みが必要であると訴える (p.76)。また、貧困が地域に集中してきたことの結果として、あいりん地区には多層的なセーフティネットが形成されてきた。一方で、これらのセーフティネットには統括する中心が存

在せず、無秩序に広がり、過剰な支援の供給や新たに社会的弱者を呼び込む逆説的な状況をもたらしているという。

第3章では、あいりん地区における居住支援の仕組みである「サポータティブハウス」の取り組みを紹介し、その成果と課題について述べられている。サポータティブハウスとは、入居者に対してスタッフが各種の支援を提供する住宅で、あいりん地区で独自に使われている名称である (p.104)。サポータティブハウスは、あいりん地区の大きな課題である単身高齢生活や社会的孤立に向き合った支援を展開しており、脆弱な住宅政策の隙間を埋めることを可能にしている。その一方で、直面する課題として①貧困ビジネスとの混同、②居住面積の狭さ、③支援の有効性に関する評価の困難、が言及されている。

第4章では、あいりん地区の社会的孤立とその帰結としての孤立死に焦点が当てられている。社会的孤立は現在の日本社会においても重大な社会問題として認識されているが、単身高齢化率が高いのみならず、寄せ場に特有の不関与規範の存在、著しく低い町内会加入率など、あいりん地区を取り巻く環境はより深刻であり、そのリスクは非常に高い。著者は、その対策を地縁、それも新たな地縁の創造に求めた上で、今後のまちづくりには当事者の参加を促すことが重要であるとする (p.145)。また、宗教者による弔いの実践に着目し、地縁の創造において果たす役割の大きさを確認している。

第5章では、大阪市による大規模再開発プロジェクト「西成特区構想」の可能性が論じられている。西成特区構想は、既に地域で活動している組織と協同することでボトムアップ型の意思決定を可能にしている。その一方で、様々な施策から漏れてしまう社会的弱者に対する支援が課題となっており、著者はその対策として個別に展開してきたセーフティネットの統合を主張する (p.184)。そして、西成特区構想の議論のプロセスを評価しつつも、社会的弱者が被るリスクについて一層敏感である必要があると警鐘を鳴らす (p.197)。

終章では、これまでの議論を総括し、あいりん地区の事例から得られた論点を再確認している。あいりん地区が向き合ってきた多くの課題は、日本社会において既に他人事ではなく、特定地域に生活困窮者を集中させるアプローチには限界が来ている。筆者は、あいりん地区を例外的な地域と

みなす考えは時代遅れとし、むしろ課題先進地として捉え、同地区が経験してきたトライ&エラーに学んでいくことが求められると論を結んでいる(p.206)。

### 3. 本書の成果と今後の展開

「女性の貧困」や「子どもの貧困」など、現在の日本社会において社会的弱者の貧困問題が顕在化し、議論の俎上に載せられるようになって久しい。著者は、あいりん地区の歴史を貧困がいかにして生み出されたかを中心に追いながら、課題先進地としてあいりん地区を捉えることで現代社会が抱える問題を読者に示している。

本書の目的は十分に果たされているが、さらに本書には少なくとも以下の3点の成果があると考えられる。

1つ目は、歴史書としての価値である。本書で丁寧に描かれるあいりん地区の歴史は、当時を生きてきた者にとってはまさに経験的事実であり、それを貧困が生み出される過程に焦点を当てて簡潔に整理し、かつ客観的に記述している。

2つ目に、著者のフィールドワークから導かれた「知」には、課題解決に資するヒントが散りばめられている。「本書ではあいりん地区を事例にしながらか多くの論点を提示してきた。そのなかで改めて強調したいことは、貧困の地域集中が社会資源を創出し、多層的なセーフティネットを作り上げてきた事実だ」(p.201)。著者は、あいりん地区をモノや能力の不足の認識に基づき捉えるのではなく、既存の社会資源の有機的な統合を問題解決の一つの糸口として捉える。そして、これらの記述に説得力を持たせているのが、著者のあいりん地区を拠点に活動した地域福祉施設の職員としての経験である。現場に身を置いてきた筆者だからこそ、良くも悪くもあいりん地区の真の姿を描写できるのではないだろうか。

3つ目は、宗教者による社会貢献の可能性が示されている点である。第4章では、宗教者による弔いの実践が紹介されており、「死」という共通項が社会関係の乏しいあいりん地区に宗教を媒介として新たな地縁を生み出す契機となっているという。本書の中にもいくつかの事例が紹介されているが、死をめぐる宗教者の実践は各所で報告があり、タイの事例では、寺院

が HIV 感染者や AIDS 患者を受け入れ、生活再建のため、道德律を核とした僧侶と病者のコミュニティを形成している [佐々木・櫻井 2012: 38]。課題先進地としてのあいりん地区でこのような活動が見られたことは、「宗教と社会貢献」を考える宗教者や研究者を大いに勇気づけるものである。

最後に、本書の今後の展開について指摘する。

貧困と地域の考察を、都市における生活空間をめぐる闘争として捉えるのであれば、本書は、社会学の古典的テーマを扱ったものであると言える。本書を通じて我々があいりん地区から学ぶべきことは数多い。しかしながら、その経験を一般化するには、あいりん地区は辿ってきた歴史や現状がやや特徴的すぎる。他の地域社会では今後貧困が様々な形で立ち現れるだろう。その際に、あいりん地区の経験をいかにして役立てるかが重要である。その点についてはいささか回答が不十分である。

今後の展開としては、貧困問題について議論の蓄積がある分野に目を向けるといったことが考えられる。例えば、開発経済学や国際協力論の分野では、貧困の地域集中という現象の解決に様々な方法で取り組んでいる。本書でも「再開発」とそれに伴う社会的弱者に対する影響が議論されたが、開発途上国では水資源開発や社会基盤事業などを行う際に、地域住民に対する補償は国や組織の違いを乗り越えた協調が進んでいる。人々の多様性を制約ではなく潜在力として捉える姿勢こそ肝要であり、それはまた、あいりん地区においても同様なのである。

## 参考文献

- 佐々木香澄・櫻井義秀 2012 「タイ上座仏教寺院と HIV/AIDS を生きる人々—  
バートナム寺院を事例に—」『年報タイ研究』(12): 21-41。  
佐藤郁哉 2006 『フィールドワーク増訂版』新曜社。